

説教 『罪と対峙する』山本 護 牧師  
聖書 創世記 4:6~7/ヘブライ人への手紙 12:2~4

農夫の兄カインと、牧夫の弟アベルの物語(創世 4:2)。主なる神はアベルの献げ物を喜び、カインの献げ物を無視する(4:4~5)。そのことで兄は憤りを弟に向けて殺す(4:8)。旧新聖書には兄弟憎悪がさまざま描かれているが、世界の古典にもこの主題は多く、人間の奥底にある何事かを照射している。

神の偏りに理由を見つけようとして、アベルの献げ物が「最良のものだから」と読み込む人がいる。しかし原典は並行した簡潔な文章で、両者の献げ物に差異はない。「カインは～を持って来た(4:3)、アベルは～を持って来た(4:4a)」、「主は～に目を留めた(4:4b)、しかし～に目を留めなかった(4:5a)」。偏愛が説明できる記述は、全くない。神の依怙最良によって「カインは激しく怒って顔を伏せた(4:5b)」。弟殺しは行き過ぎだったとしても、踏みにじられたカインの気持ちには情状酌量の余地もあろう。

「わたしは恵もうとする者を恵み、憐れもうする者を憐れむ(出エジプト 33:19)」。主権が徹底した神の偏愛、人間には依怙最良に見える。だがカインに語りかける神の言葉をよく聞いてみると、「愛は兄にこそ注がれているのかも」と見方が逆転する。「主はカインに言われた。〔どうして怒るのか。どうして顔を伏せるのか。もしお前が正しいのなら、顔を上げられるはずではないか〕(創世 4:6~7a)」。兄カインには、己が憤りを見つめさせ、自分自身で責任を負うよう、求めているのではないか。

言いつけに従うだけの僕で終わらず、固有の人格を持ち、自らの責任で冒険すること。神はこのような生き方をカインに期待した。「正しくないのなら、罪は戸口で待ち伏せており、お前を求める。お前はそれを支配せねばならない(4:7b)」。興味深い言葉だ。神の被造物たる「私」を捕らえようと待ち伏せする「私の罪」との対決が求められる。罪との闘いは「神に丸投げ」して事足りるものではない。

罪は暴力的だとは限らない。「罪は戸口で待ち伏せており、お前を求める」ように利害や自尊心をくすぐる誘惑も用いる(マタイ 4:3~9)。だからといって、「罪は私の手には負えない」と易々と諦め、甘えた気持ちで「十字架に丸投げ」しないでほしい。神は「もしお前が正しいのなら(創世 4:7)」と私たちの心深くに呼びかけ、「顔を上げよ」と根底から押し上げようとされているのだから。神は、無邪気な弟アベルに接するようではなく、人格を持った成人として兄カインを遇した。そして「正しくないのなら」と自己吟味を求め、罪と対決して「お前はそれを支配せねばならない(4:7b)」と命ずるほど期待した。ところが兄は逆に、罪に支配されて弟を殺した(4:8)。すなわち、ここに人間の祖形がある。

「あなたがたはまだ、罪と戦って血を流すまで抵抗したことがない(ヘブライ 12:4)」。罪との戦いとは何か。「恥をもちとわなないで十字架の死を耐え忍んだ(12:2)」イエスを「見つめ(12:2)」、「御自分に対する～反抗を忍耐されたことを、よく考えて(12:3)」己が罪に対峙すること。己が罪に挑むこの冒険は「霊の父はわたしたちの益となるように、御自分の神聖にあずからせる目的でわたしたちを鍛えられる(12:10)」場そのもの。教会は冒険をするための拠点となる。霊に鍛えられ、神聖に触れている私たちは、自分の足で歩き(12:13)、「お前は正しいのか(創世 4:7)」という問いを自らのものとする。



【おまけのひとこと】

神に従うとは 言いつけ通りに動くことではない 唯々諾々と従ってしまうことは むしろ神の創造を拒絶する罪であろう 世には怠惰な罪が多い 分かりきったいつもの安心をくり返すことなど